

館蔵資料紹介 No.8

生田正庵旧蔵の書

安東俊六

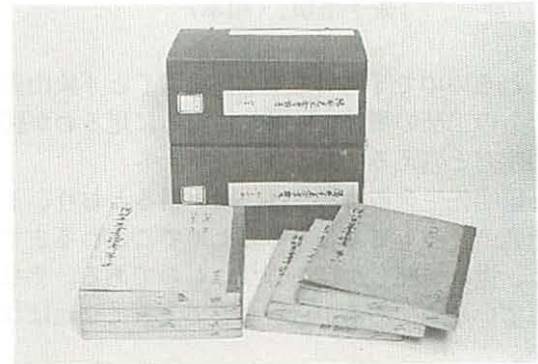
蒸し暑い6月の午後のことだった。

着任して間がなかった私は、蔵書を見てまわろうと書庫の中に入った。中哲、東洋史、中文と関係の図書を一通り見て歩いたが、書架には唐本の類いが全く見当たらなかった。係の方に尋ねると、一階の雑誌の奥に別置してあるのだという。当時の長良分館は二階が書庫の入り口になっていた。狭い階段を降りると、一番奥まったところに唐本は置かれてあった。帙のないものも平積みもされず、スチールの棚に押しつめられたように立てられていた。つい先日まで帙が整然と列んだ書庫に出入りしていただけに、私には目の前の本の列は、何とも貧相に見え、痛ましくさえ思われた。

しかし幸いにも唐本の保存の状態はよかった。殊に文学や史学の関係の本にはほとんど虫の損じたものがなかった。ただ、哲学の棚の前に立ったとき、目立って虫の損じた本があるのが目をひいた。その本をそろりそろりと棚から引き出してみると、虫こそいかなかったものの、綴じ糸さえ切れたところがあって、すぐにも繕わなければならない状態であった。そのままかかえて事務室に運ぼうと明るいところまで持って出た。そしてそこでふと目にとまったのが、表紙に押された昌平坂学問所の印であったのである。どうしてこんなところにこんな本があるのだろう。私は不思議な気がした。さきほど来、丹念に見てきた唐本の中には、見るべきほどの珍しいものはなかった。殊に自分の専門の文学にいたっては、全くと言っていいほど本がなかった。なのにこの印である。まるで狐にでもつままれたような思いで事務室にかかえて行って虫つくろいを依頼した。

それから数年後のある日、九大名誉教授の荒木見悟先生からお手紙をいただいた。岐阜大学に生田正庵旧蔵の書物があるはずだ。ご遺族がそうおっしゃっているということであった。私は図書館に行き尋ねた。長く勤めておられた方に伺ってみたが、その方は覚えがないという。もっと古い方に聞いてあげましょうと問い合わせても下さったが、それでも結局分からなかった。私は已むなく、調べてみたが分かりませんと、荒木先生に手紙を書いた。そして投函した。

手紙を投函したあとで、もう一度荒木先生の手紙を読み返してみた。そしてその時ふと頭に浮かんだのが、例の昌平坂学問所の印のことであった。私は図書館に走っていった。書庫に入ると、棚にはあの『遜志斎集』がつくろいもされぬままにもどされてあった。はやる気持ちを押さえながら、本に押された大学の受入の印を見た。昭和24年6月10日受入とあった。事務室で受入の原簿を見せてもらおうと、あったあった、同日に購入した32部の書名がそこには列記されてあった。先に私が尋ねた館員の方も、恐らくそれでしょうとおっしゃる。ともかくあった。原簿のその部分を写させてもらって、荒木先生に送った。



登録の順序は、史部・集部の別でもなく、また時代の順でもないが、敢てここで列べかえることはしない。今後この旧蔵書を調査する人の利用の便を考えて、登録番号とともに書名を列記しておくことにする。

- | | |
|-------|------------------|
| 14669 | 『章氏遺書』 |
| 14670 | 『毋不敬齋全書』 |
| 14671 | 『東漢会要』 |
| 14672 | 『唐会要』 |
| 14673 | 『五代会要』 |
| 14674 | 『西漢会要』 |
| 14675 | 『二程全書』 |
| 14676 | 『居士伝』(和本) |
| 14677 | 『邵子擊壤集』 |
| 14678 | 『象山先生全集』 |
| 14679 | 『学部通弁』 |
| 14680 | 『陽明先生遺言逸事弁證』(鈔本) |
| 14681 | 『七十二朝四書人物考』 |

- 14682 『三魚堂集』
- 14683 『龍谿王先生全集』
- 14684 『敬軒薛先生文集』
- 14685 『陽明先生全書論考』(鈔本)
- 14686 『四書朱子異同条弁』
- 14687 『性理大全』
- 14688 『朱子文集』
- 14689 『明史』
- 14690 『遜志齋集』
- 14691 『皇朝通考』
- 14692 『杜氏通典』
- 14693 『馬氏文献通考』
- 14694 『皇朝通典』
- 14695 『皇朝通志』
- 14696 『鄭氏通志』
- 14697 『欽定統通典』
- 14698 『欽定統文献通考』
- 14699 『欽定統通志』
- 14700 『朱子語類』(和本)

これらの中で『陽明先生全書論考』と『象山先生全集』の二部の書は、特筆して誇るに足るわが図書館の宝だと言えるであろう。

『陽明先生全書論考』は、題が語るとおり、王陽明研究のノートである。あらためてことわるまでもなく、世に一部しか存在しないものである。それを蔵しているのであるから、心して大事にせねばなるまい。

『象山先生全集』は、陸象山の文集を精査された九州大学教授・福田殖先生のご教示によれば、他に存在の知られていない明版であるという。『象山先生全集』の名で刊行された明代の三種の刊本(正徳16年刊本、嘉靖38年刊本、嘉靖40年刊本)のいずれともこの刊本は異なっている。因に当館の蔵する『四部叢刊』所収の『象山先生全集』は、福田先生のお説によれば、嘉靖40年刊本の系統のものと考えられるそうだが、試みに対校してみれば瞭然、体裁からしてこれとは明らかに違う。

大事にすべき本をもう一部付け加えれば、先に記した昌平坂学問所の蔵書印のある『遜志齋集』である。この本はどのような経路で正庵の手に渡ったのであろうか。荒木先生のご調査でも明らかにならなかった、岐阜大学が正庵の蔵書をどのようにして買うことになったかということとともに、興味は尽きない。

最後に、荒木先生の書かれた「生田正庵小伝」

(『中国哲学論集』8号・1982年10月)に據って、生田正庵を大まかながら紹介しておこう。

生田正庵は、明治3年10月25日、兵庫県田原村に生まれている。歿したのは昭和11年6月28日、東大附属病院に於てである。享年67。幼名は喜市、のちに中孚と改め、通称は格、正庵はその号である。農村の地主の子であったようだが、明治17年(15歳)岩国の西郊に私塾を開いていた東沢瀉の門に入っている。この年沢瀉が閉塾して隠遁生活に入ると、沢瀉の嫡男正堂(名は敬治)の證人社に入って指導を受けている。正庵が東家の私塾に滞ったのは約2年で、一旦帰郷して独学自習の生活に入ることになる。明治23年(21歳)、急に思い立って、長崎県針尾島の楠本碩水に手紙を出して入門を願っている。碩水は朱子学を信奉し、沢瀉は陽明学を信奉していたが、この両碩学は学派の違いを越えて親交があったので、正庵もその縁で碩水の名を知り学徳を慕って入門を願ったものと思われる。碩水はこの願いを快く受け入れ、その師弟関係は碩水が歿する大正5年12月23日まで続いている。この間正庵は、明治41年(碩水77歳、正庵39歳)と大正元年の2度針尾島に碩水を訪ね教を乞うている。また頻りに楠本家の蔵書を借覧しては筆写し、整本架蔵している。

これは明治30年代のことだと考えられるが、正庵は京都に居を移し、南禅寺の毒湛老師に参禅し、5、6年間熱心に居士としての生活を送っている。先掲の蔵書中に『居士伝』があるのもこの為であろう。

正庵が東正堂の勧めによって上京するのは大正6年頃のことである。東京では雑司谷に居を定め、のちに吉祥寺に移っている。特に定職はもたず、陽明学会の有力メンバーの一人として、自宅その他で会講を持っていた。雑誌「陽明学」は東正堂の畢生の事業であったが、正庵はそのよき相談相手として、雑誌編集や集会連絡に関与している。

針尾島の楠本家とは、碩水歿後も碩水の甥正翼との交友が続き、大正8年東京帝大に進学した正翼の嫡男・正継がその講筵に列するようになる。正堂と正庵は正継の向学心に応えようと格別に意を用いて、正継の都合のよい時間に講義をあわせたり、指導方法を相談したりしている。

正庵の長女・生田正子氏は、すでにお亡くなりになられたが、蔵書の残りは、全て九州大学が譲り受け、目録もできている。末尾にそのことを記して、後に研究される方に供することとする。

(あんどろ しゅんろく:教育学部教授)
(配置場所:特別資料・フィルム庫)